

クララにおける受肉の思想

木 村 晶 子

目次

序

1. フランシスカンにとっての受肉の秘義

1.1 創造のわざと受肉の関係

1.2 神の謙遜と受肉

1.3 キリスト化すること

1.4 喜びの源である受肉

2. クララにとっての受肉の秘義

2.1 キリストを見つめる～変容

2.2 受肉と人間の尊厳

2.3 三誓願と受肉の秘義

2.4 神の協働者

むすび

序

クララの受肉についての思想を述べる時、まず最初に、フランシスカンにとっての受肉の秘義は、どのように受け継がれてきたのかを考慮する必要がある。

フランシスカンにとって、「受肉」とは単に「みことばが人となられた」というだけに留まらない。神の謙遜と創造のわざとの関係に重きを置き、三位一体におけるキリストのペルソナを中心に考えられているのである。

教皇ヨハネ・パウロII世が「受肉の神秘を祝うとき、私たちは三位一体の神秘と、御父を具体的に現すナザレのイエスの神秘とに目を注ぐの

である。」と述べているが、これはまさしくフランシスコの精神を表現したものであり、フランシスカンの祈りの基礎となっている⁽¹⁾。

また、フランシスカンにとってこの世界は神の顕現であり、世界はキリストによって贖われ、キリストによって聖化されるために創られたのである。明らかにフランシスコの霊性はキリスト中心であり、キリストを「宇宙的キリスト」ととらえているのである⁽²⁾。

クララもこのフランシスカンの解釈に忠実に従い、キリストの受肉は、人間のみならず全宇宙の贖いと聖化であると強調している。本論においては彼女の受肉の思想をさらに深く検討していきたい。

1. フランシスカンにとっての受肉の秘義

受肉という秘儀は復活とともにキリスト教において最も中心となる教義であるが、フランシスカンの霊性においても大変重要な位置を占めるものである。フランシスカンの霊性によればまず第一に、キリストが人間となられたという事実は、単に神が人となられたということにとどまらず、キリストを通して創られた神の創造物全体がキリストをまとうことになり、創造物全体が聖化されてゆくと考えられる。第二に、神が人となられたということは、神の最大の謙遜な行いであり、人間に対する最大の愛の表現である。フランシスコは、キリストが弱い人間の姿を取られただけでなく、最終的には人に食べられるパンのなかにご自分を置くという方法を取ってまで謙遜になられた神のなさり方にただただ感動していた。彼はここに受肉のすばらしさをみるのである。第三に、フランシスコがいつも望んでいたことは、「自分がキリストのようになる」ことであった。これは「キリスト化」することと言ってよいであろう。彼にとって受肉とは、キリストのように考え、キリストのように見て、キリストのように生きることに他ならない。つまり、キリストに同化することなのである。第四に、フランシスカンにとって、受肉は救いと喜びがひとつになったものなのである。受肉によって神のコムパッションが示され、弱い存在のすべてのものが救いと和解の喜びへと変容されるのである。

以上の4つのことがフランシスカンの受肉の思想の要素と言えるが、

この章ではさらに詳しくそれぞれの要素について述べてゆこう。

1.1 創造のわざと受肉の関係

フランシスカンにとって創造のわざと受肉とは切り離して考えることはできない。ザカリー・ヘイズのことはよれば、「神はキリストが存在するようになるためこの世を創られ、そしてキリストが存在するために人間が作られなければならなかった」のである⁽³⁾。「みことばは肉となった」ことによって、神は愛のうちに我々人間のところまで降りてこられ、そして人間を包み込むのである。みことばが肉となるとき、みことばを通して作られたすべてのものが現実に見えるようになる。そして、みことばが創造物の中に入られるとき、つまり、みことばがこの世に入られるとき、神のアイデンティティが現されるのである。そして、人間は神の愛、神の謙遜さを知るのである⁽⁴⁾。

ボナヴェントゥラも「受肉」は単に神が肉をまとわれたということ以上の意味と受け取っている⁽⁵⁾。つまり、イエスは神のみことばが人間となって見えるものとなり、それによって私たち人間は神の究極の本質、および、人間の本来あるべき姿と本質を読み取ることができるのである。ザカリー・ヘイズはボナヴェントゥラの主張をまとめて言う。「もし神が限りなくご自身の中で交わりを持たなかったなら、受肉もなかったし、ご自身がほかの何ものとも交わりをもたなかったであろう。したがって、神が三位一体であることは必然となる。神が三位一体の交わりを本質としないなら、受肉はありえなかったのである⁽⁶⁾。」

三位一体のペルソナは愛において深く結びついているので、創造のわざ、贖い、救いのわざはその愛において、愛から、愛のためになされるのである。神の側から人間の低さにまで低くなられ、あるがままに私たちを愛されたのであるから、キリスト者も神の謙遜な愛にならって互いに愛し、赦し、憐れみ、大切にしあわなければならないのである⁽⁷⁾。神は愛であるなら、私たちもその美しく信じがたい愛の交わりの中の一部である。したがって、創造されたものは単に神のわざを表現しているだけでなく、限られた次元ではあるが、神の美しさと善を解き放っているのである。

これは、キリストの充満が宇宙のゴールであり、それは受肉のためな

のだというティヤール・ド・シャルダンの思想にも似ている。宇宙はキリストのために創られ、キリストに向かっている。キリストのうちに憩うまで安らぎを得ることはない。こうして宇宙全体がキリスト化されてゆくのである⁽⁸⁾。

キリストは宇宙の真中の生けるペルソナである。したがって、ベアトリチェ・ブルートーのこぼれを借りれば、宇宙的キリストの中に生きることはキリストの秘義のうちに住むことであり、我々人間もキリストのからだの完成に参与し、キリストとともにこの宇宙の完成に参与してゆくのである⁽⁹⁾。

1.2 神の謙遜と受肉

「みことばが肉となった」ということは、神の謙遜の表れであって、人間に対する愛の最高の表現である。このように、神の創造のわざと神の謙遜とは深いかわりがあり、これがフランシスカンにとっての受肉の秘義なのである。

神の清貧と謙遜は他者に自分を明け渡すこと、つまり、ケノーシスである。受肉の神秘において、神は御子つまり神のこぼれを通して、ご自身を愛のかたちで私たちにお与えになるのである。受肉とは神のみことばが人となり、栄光の豊かさから弱い人間の体を取られたという謙遜の表れである。フランシスコが最も神の偉大さを感じ取ったのはこの神の謙遜ななさり方である⁽¹⁰⁾。特にパンという最も謙遜な形、もっともありふれた形の中にご自分を現されたということに対しての応答は驚き以外にない。神は人間の肉においてご自身を表し、人間の肉になってゆくのである。ミサ聖祭はまさしく受肉であり続ける。しかし、パンはあまりに日常的すぎて、誰も目に留めないあたりまえの食べ物である。この神の謙遜は霊的な目で見なければ、簡単には気づかない⁽¹¹⁾。

前節において、受肉は創造のわざそのものことであると述べたが、受肉において、神は謙遜にも、創造物の中に、特に人間の中に降りてこられ、創造されたものを神性と的一致にまで高めようとなさるのである。

同時に、受肉は「人間の弱さやもろさまでも受け取られた」ということなのである。この謙遜を表しているのが、ひとりの女性から生まれたということである。偉大で栄光ある神聖なみことばが、弱くもろい人間

性をまとったひとりの人間としてお生まれになったという事実。そして、神の子が死までも受け取ったという事実。これこそが最大の謙遜である。人間のもろさから死にいたるまでを受け取ったこのイエスの足跡に従うこと、これこそがフランシスコの道であり、真の喜びの意味なのである⁽¹²⁾。このようにしてキリストに似たものとなること、さらに自分を徹底的に空にして、明け渡すこと、つまりケノーシスこそがフランシスコの理想であり、キリストの受肉に与ることなのである。

1.3 キリスト化すること

フランシスコは絶えず、「キリストに似たものになりたい」と願っていた。したがって、絶えず彼の心の中にはイエスがいた。「イエスはいつも彼のこころのなかに、口に、耳に、目に、手に、いた。彼はいつもからだ全体でイエスを運んでいた」とチェラノの伝記には描かれている(チェラノ伝記9)。フランシスコは文字通りキリストを肉体としてまとうという意味のみならず、心の中にも、心のあり方そのものも、キリストと同じ思いになることを願っていた⁽¹³⁾。キリストが十字架から見るように、キリストがこの世と神を見るように、キリストのように変容された視線で神を見ることを望んでいた。特に十字架上のイエスを抱き、愛し、その御傷を受けるまでキリストと一体になることを望んだ。まさしくキリストの受肉を受肉したのである。

1.4 喜びの源である受肉

教皇ヨハネ・パウロII世は、『受肉の秘義』の中で、受肉と救いと喜びはひとつであると強調しているが、これはまさしくフランシスコの精神である。完全な喜びとはフランシスコの目指すべきところであるが、フランシスコは、兄弟たちからも拒絶されたときに本当の喜びを味わったというエピソードがある。フランシスコにとってもっとも大切なのは、拒否されたときの思い、あるいは苦しみを味わったときの思いこそが、受肉されたイエスが人間として味わった思いであるということを知ることである。従って、拒否されることを受け入れてゆくことはイエスの味わったことを同じように味わうことである。それゆえ、フランシスコにとって受肉は真の喜びの源なのである。受肉によってイエスは人間とし

ての条件を、限界のある、弱く、もろく、みじめな、血と肉をもった人間という条件を受け入れてくださり、さらに自分を十字架につけた人たちさえも受け入れるという愛を示してくださった⁽¹⁴⁾。フランシスコにとって、受肉は贖いなのであり、救いの喜びなのである。

この喜びを味わうことがフランシスコとクララの目指す生き方である。しかし、これは現代においては大きなチャレンジである。現代は、人間の可能性を過大評価し、無限に可能性があるかのように考え、苦しみや死を遠ざけ、あるいは逃れようとする。そんなことはないかのようにタブー視する。美しくたくましく、満足し、自信にあふれ、完璧な人間の条件を求めようとする。

これに対して、フランシスコとクララの受肉に対するアプローチはまったく正反対である。弱く、もろく、限界のある人間の存在の代表者として人間性を受け取り、苦しみ、十字架につけられたイエスをみつめることなのである。イエスの受肉はとても身近な人間の受肉なのである。それは、非常に具体的な現実の普通の経験、つまり、誕生・死・苦闘・苦しみ・喜び・敗北などの普通の体験にこそ見出すものなのである。フランシスコとクララにとっての受肉とは、自信のある人々や、満足して生きている人々のみならず、道端で物乞いをしている人々や見過ごされて無視されている人々や病気の人々にこそ受肉を見出すのである。いわば、受肉とは我々は何なのかという本質を示しているといえよう⁽¹⁵⁾。

フランシスコとクララは、人間が最も価値ある存在であると同時に、一方では、とても弱く、もろい存在でもあることの中に受肉の秘義を見出すのである。つまり、イエス・キリストはこの弱く、もろく、限界のある人間性をあえて引き受け、十字架に至るまでの苦しみを引き受けられたのである。このことによって、苦しみ、差別され、無視されている人々の中にこそ受肉を見出す。フランシスコとクララは人間の弱さの中に逆説的に尊さを見出し、そこに受肉の秘義を見るのである。

受肉は神のコムパッションそのものであり、それが救いへとつながるのである。こうして、人間にとって受肉は他者に向かう共感であり、他者に向かうこと、憐れみのこころをもって苦しむ人々に向かい、ともに歩むこととなる。それはまた和解と喜びへと通じるのである。

2. クララにとっての受肉の秘義

クララはフランシスコの弟子の中で、フランシスコの理想をもっとも忠実に体現した弟子と言えるが、受肉の思想に関しても全くその通りである。前章で述べたフランシスコの受肉についての考え方は、クララにも深く刻み込まれている。したがって、フランシスコとクララの間には基本的に大きな差はないが、クララの場合、表現方法に女性的な特徴があると言えよう。特に、キリストに近い者となるためにも、聖母マリアにならい、同じ女性としてキリストを自分の中に宿し、キリストを運ぶ道具となろうとしている。

さらに具体的に彼女の思想をみていくこととする。

2.1 キリストを見つめる～変容

「フランシスコとクララを切り離すのは難しいことです」。これは、教皇ヨハネ・パウロ二世がフランシスコとクララに向けた賛歌の冒頭である⁽¹⁶⁾。二人は、我を忘れるほどキリストへの愛に同じ激しさで燃えていた。クララは、彼女が遺訓の中でフランシスコについて、「主を熱愛する者であり、そっくりまねる者」だったと述べているが、彼女もまたその通りに生きたのである(遺訓2)⁽¹⁷⁾。主の霊とその聖なる働きを持ち、聖三位の住まいとなって内なる人への変容を遂げ、キリストに似た者となり、それから、主の兄弟・姉妹となり、母となり、花嫁となることなのである⁽¹⁸⁾。このように、クララにとって、受肉とは、フランシスコにならって、絶えずキリストを思い、キリストと一体化することである。

フランシスコが絶えずキリストを思っていたように、クララもキリストのイメージをいつも心に描くことを心がけていた。それは特に「鏡のイメージ」として表現されている。プラハのアグネスへの手紙には次のように描かれている。

「あなたの精神を永遠の鏡の前にお据えなさい。あなたの靈魂を栄光の輝きの中にお置きなさい(ヘブ1, 3)。あなたの心を神のご本性の姿の前でおとどめなさい。そして、観想によって、あなたご自身のすべてをかの神性の似姿に変化させなさい(II コリ3, 18)」(第三の手紙

12-13)。

クララはキリストを鏡として毎日眺めることを勧める。そしてその上に自分を重ねてゆき、キリストと一つになってゆくように絶えず観想することを勧める。

「この小羊は、永遠の栄光の輝き(ヘブ1, 3参照), 尽きない光のきらめき, また, 曇りない鏡なのですから(知7, 26参照)。この鏡の中を日毎に眺めなさい。ああ, 王妃, イエス・キリストの浄配よ。あなたはまた, この鏡の中で, ご自分の顔をジックリごらんなさい。そこに見えるあなたは, 内も外もたいそう着飾って, さまざまなすべての徳を身につけ, 同じように花と衣裳で飾られ, ご立派です。ああ, 娘よ, いと高き王のいとも清い浄配よ。この鏡の中には, 幸いな貧しさ, 聖なる謙そん, そして言い尽くせない愛が映し出されています。言わばあなたは, 神の恩恵により, この鏡の全体にわたって瞑想できるのです」(第四の手紙14-18)。

クララは「キリストのみ姿を最も強く刻みつけていた」。何よりもまず, 主のご降誕と十字架の苦しみをいつも思い描いていた。

「鏡を見るあなたは, どうかまず最初に, まぶねに寝かされ, うぶ着に包まれたお方の清貧に心をとめてください。(ルカ2, 7参照)。感嘆すべき謙そん, 驚くべき清貧! 諸天使の王, 天地の主が飼い葉おけに寝かされていらっしゃるのです! でも次には, さらに深く鏡に見入って, 主の謙そん, それに幸いな貧しさ, 主が人類の救いのために忍べられた無数の労苦と処刑の苦しみを思いめぐらしなさい。でも遂にはこの鏡の奥を見極めて, 十字架の木のもとで苦しみ, 十字架上で死を遂げんとされた, 言い尽くし難い主の愛を観想しなさい」(第四の手紙19)。

また, 十字架上のキリストに思いをはせ, 聖母マリアの苦しきも合わせて観想するように勧める。

「十字架を取って、私たち罪人のために十字架につけられたおん子イエスのように、神を心からお愛しになりますように。主の思い出は、あなたの記憶から決して一度たりとも消え去りませんように。それどころか、絶えず、十字架の秘儀とおん母の苦悩とを黙想なさって下さい。おん母は、十字架の下に立っていらしたのですから」（ブルージュのエルメントルードへの手紙）。

このように「イエスをじっと見つめること」がクララにとってもっとも大切なことであり、姉妹たちに絶えず教え続けたことである。

「人の子らのうちで一番美しいお方でいらっしゃるあなたの浄配は、あなたの救いのために、人間として最も低い者となられ、あなどられ、むち打たれて、おん肌は破れ、ついに十字架上の苦悶のうちに亡くなられました。このうえなく気高い王妃様、その主をジッと見つめて思いめぐらし観想なさい。ひたすらあやかる望みを抱いて」（第二の手紙 19-20）。

特に、イエスの苦しみを思い、観想することが彼女の望みであった。それは「受難の聖務日課」に現れている。チェラノの伝記によれば、クララがフランシスコの編んだ主のご受難の聖務日課を好んでさげしていたことがわかる。また彼女には、今はもう知られていないキリストの五つのおん傷を崇める固有の祈りがあった。絶え間なく主のおん傷をしのぶために、クララは衣服の下に13の結び目のついたなわ帯を身につけていた。（チェラノ伝記 30）この数は彼女にとっておん傷の聖数であった。

また、六時課・九時課の時間は、彼女にとっては、主のご受難に没念する特別な機会であった。それは、これらの時刻にキリストは十字架につけられたからであった。

チェラノの伝記には次のように描かれている。

「主のご受難を悼み悲しむことに、クララは真心から精通していた。とうといおん傷は、痛ましさを覚える源泉であると共に、また、甘い喜びを避ける原因でもあった。キリストのご受難に注ぐ涙は彼女を

すっかり酔わせ、彼女は、苦しむキリストを愛によって自分の心に深く刻みつけ、しばしば心に思い描いていた。クララは修練女たちに、十字架につけられたキリストを思っただき痛むように指導し、言葉で教えることは模範をもって示していた。……六時課と九時課の聖務の際には、いけにえとなられた主と共に自らも捧げられるために、非常な苦しみにかられるのが常であった」(伝記 30)。

クララは受難における肉体的苦しみも深くともに味わい、十字架を取って最後まで御父のみ旨に従ったイエスを見るように、姉妹たちを指導した。十字架のキリストにおいて我々は赦され、癒され、新しい命に招かれるのであるから、クララもキリストのように苦しみ、人々をキリストへと導くことを使命とした。こうして、彼女もまたキリストへと変容されてゆくことを願った。フランシスコは聖痕を受けるまでに徹底的にキリストを真似たが、一方クララは、十字架に付けられたキリストと同じ苦しみを観想することでキリストに似たものとなろうとしたのである。

クララは、フランシスコの生き方をかがみとしながらも、この「キリストのみ跡に従う」という面で、女性的な仕方で強くキリストと一致していたのかもしれない。つまり、「共に苦しみ、共に悲しむために、み跡に従う」ということに重きを置いていたのであろう。こうしてクララは、キリストのみ跡に従うという考えを、彼女の神秘的婚姻の理想に合致させている。「貧しく十字架につけられたお方への燃え立つあこがれ」は、愛する靈魂を愛するお方と同じ姿に変えてゆく。このようにクララは、「貧しいキリストを貧しいおとめとして」かき抱くのである⁽¹⁹⁾。

このように、キリストを鏡とし、キリストに近づくことによって、最終的に目指すことは、自分をキリストの似姿に変容させることであった。

伝記には「クララは内にキリストをまとっていた」と表現されているが、クララはまさに受肉を成就させていったのである(伝記 4)。

さらに、共同体において、姉妹たちが互いの中に「受肉されたイエス」を見つかることができるように、また、共同体以外の人々からも姉妹たちの中にイエスが見えるように、クララは絶えず望んでいた。コロサイ 3 の 12 にあるように、キリストにならって、「憐れみの心、慈愛、謙遜、

柔和、寛容を身につける」ことが、共同体の目標であった。

「主ご自身が私たちをお立てになったのは、私たちが他の信徒の模範となりかがみとなるためばかりではなく、同じ召命を受ける姉妹たちのかがみとなるため、彼女たちもまた、世俗に生きる人々のかがみとなり手本となるためです。主が私たちを人々のかがみとなるはずの姉妹たちのかがみとなるという、偉大な使命のために召された以上、私たちには主を賛美し、さらにそのうえ、主において善をなすよう励む重い義務があります。これこそ、私たちがこの生活様式の中で生きながら、他の人々に高尚な模範をのこさなければならない理由であり、また、この非常にわずかな努力の報いとして、永遠の至福が受けられるようになる理由なのです」(遺訓 19-20)。

「神に似たものとなりなさい。そのためにイエスを熟視しなさい。イエスは神性の現れであるから。」これが、クララの霊性の中心であり、彼女自身の受肉についての黙想から生まれた美しい実りである。

2.2 受肉と人間の尊厳

前章でも述べたように、フランシスカンにとって、創造のわざと受肉は切っても切り離せない関係にある。特にクララは神の似姿という人間の尊厳を強調する⁽²⁰⁾。クララは、人間性の理解では、フランシスコ以上に楽観的であったと言える。つまり、人間は最も価値ある創造物であることを強調している。人間は良いものであり、神が宿られる尊いものである。彼女は、ある意味、キリスト中心のヒューマニズムを持っている。

「ごらんなさい。今や、被造物の中でもっとも貴い忠実な人の靈魂は、神の恵みによって、天よりもいっそう偉大であるということが明らかです。創造主は、諸天も全被造物も把握できないおん方です。敬けんな靈魂たちだけが、創造主の住まい、その座になります」(第三の手紙 21-22)。

フランシスコは忠実な魂を“home and mansion”と呼び、クララは

“mansion and throne”と呼んでいた。おそらく throne はキリストを受け取り抱いた聖母マリアと “Throne of Wisdom” のイメージだろうと思われる⁽²¹⁾。この表現からしても、フランシスコよりずっと人間の魂の偉大さを強調していると言える。

このように、クララは、人間がいかに美しいかを発見することに力を注ぐ。そして、彼女自身は、「創られ、贖われ、聖化された」ことをいつも喜び、自らを祝福された魂と感ずることに、幸せを覚えていたのである⁽²²⁾。

「主よ、あなたは讃えられますように。あなたが私をお創りになったからです」(伝記 46, 列聖調査証言 iii 20)。

「姉妹たちの一人が、『誰に話されたのですか』と尋ねた時、彼女は答えて、『私は、自分の祝福された靈魂と話しています』と言った」(チェラノ伝記 46)。

忠実な人間の魂は、確実に、神の祝福を受け、偉大なものとされ、そこは神の住まいとなるのである。

「ごらんなさい。今や、被造物の中でも最も貴い忠実な人の靈魂は、神の恵みによって、天よりもいっそう偉大であるということが明らかです。創造主は、諸天も全被造物も把握できないおん方です。敬けんな靈魂たちだけが、創造主の住まい、その座になります。そしてこのことは、不敬けんな人々には欠けている愛によってのみ実現することです。真理はこう言っておられます。『私を愛する人は、私の父から愛される。私を愛する人を私も愛そう。こうして私たちはその人の所へ行き、そこに私たちの住まいを設けよう』(ヨハネ 14.21, 23)。それですから、おとめらの中でも栄えあるおとめがおん子をお宿しになったように、あなたは、彼女の謙そんと特に清貧のみ跡に従うなら、疑いもなく、いつもおん子を、あなたの清いおとめの身体に靈的にお宿しになれるでしょう。あなたはご自分のうちに、あなたとそして万物を保有されるお方をお抱きになるでしょう。また、この世のはかないもろもろの所有物に比べても、よりいっそう永続的に、そのお方を所有

なさるのです」(第三の手紙 21-26)。

キリストを愛する人は、キリストとともに住むようになる。忠実な魂はキリストと結ばれ、キリストの住まいとなるのである。クララは神が宿る場所である魂を強調し、その中に人間のもっとも価値ある尊厳を見出すのである。そして、人間の生命そのものがキリストを抱いており、我々自身がキリストの身体であることを意識するように促している。特に女性は、聖母マリアにならって、自分の中にキリストを宿し、キリストと一体化するだけでなく、キリストを生み出すこともできるのである。これが、女性特有の受肉の仕方と呼べるかもしれない。

2.3 三誓願と受肉の秘義

クララにおいて、三つの誓願は受肉の神秘をより深く理解するためにある。

まず、従順をキリストとフランシスコに誓うこと、これがクララの召命であり、行動である。そして、これによって受肉の神秘をフランシスコの洞察をもって味わうのである。ご自分の意志ではなく、神のみ旨を求め、それを果たすために、徹底的に自己を神に委ねられたキリストに従うこと、これこそがクララの目指すところである。

次に清貧における受肉の秘義であるが、フランシスコと同様に、クララはキリストの貧しさと謙遜とを結びつけて考える。なぜ神の子が貧しい女の胎内に入り身体をもったのか、なぜ貧しく、軽蔑されることを選び、十字架上の死まで受け取られたのか。クララはアグネスへの手紙の中で次のように言う。

「ああ、幸いな貧しさ。貧しさを愛し、これを受け入れる人々は、永遠の宝があたえられます！ ああ、聖なる貧しさ。貧しさに在って、貧しさを切望する人々に、神は天国を約束され(マタ5, 3参照)、確実に永遠の光栄と幸いな生命とをお与えになります！ ああ、神意になかった貧しさ。おん自ら命じて造られた天地を(詩篇33, 9参照)続べ治められ、今も治めておられる主イエス・キリストは、何よりもまず、貧しさをお受け入れになりました。きつねには穴があり、空の

鳥には巣があるのに、人の子キリストには頭をやすめる場所もなく(マタ 20)、みかしらをたれて息絶えられました(ヨハネ 19, 30)。それですから、これほど偉大な主が、おとめの胎に下られ、この世では侮られ、乏しく、貧しくなろうとされたのならば、それは、天上の食物にひどく飢えている乏しく貧しい人々が、天国を所有し、主のうちに在って富むためでした。それで、あなたは歓喜に溢れてお喜びなさい。非常な喜びと霊的喜悦で満たされますように。あなたは、栄誉よりも世から無視されることを、地上の富よりも貧しさをいっそう好まれ、さらに地上よりは天国に、より多く宝を積むことを選びになりました。そこでは、さびもしみもつかず、盗人も入ることはありません(マタ 20 参照)。それですから、あなたの報いは天国できわめて大きく、彼処であなたは、いと高きおん父と栄えある童貞のおんひとり子の妹・浄配、そして母とよばれるのにふさわしくなるでしょう」(第一の手紙 15-24)。

キリストの清貧は、自己を明け渡すケノーシスにあり、空となったがゆえに、キリストは神の至福で満たされ、栄光を得るのである。清貧は変容である。そして、キリストの受肉と贖いの苦しみという清貧によって、人間を罪から救うのである。したがって、この贖いのわざと受肉とは必然的にリンクしており、この神聖な交換こそが受肉でもっとも中心となることである。クララが清貧にこだわるのはこのためである。

さらに、清貧と処女性はキリストとの結びつきを強くする力である。貞潔の誓願によって、キリストの兄弟・姉妹・母となることができる。この最高のモデルは、聖母マリアである。クララは、文字通り神の計画を体現したマリアにならって、キリストを宿し、いつもキリストを運ぶ道具となろうとする。そして、キリストによって聖化された清らかなおとめのからだを、神のみことばのすまいとするのである。

2.4 神の協働者

クララは、姉妹たちや信徒個人がキリストにならって聖化されてゆくことだけを望んだのではない。彼女の望みは、共同体全体が、教会全体が聖化され、文字通り、キリストの住む場となることである。つまり、

教会共同体全体を変容させ、教会が受肉することである。そのためにクララの共同体が存在し、共同体の祈りが必要なのである。彼女たちの使命はこの点で明らかなのである。

クララは祈りの使命の重要性を指摘するとともに、「神の協働者」としての使命も強調する。教会全体を、社会全体を聖化し、受肉させるためには、一人一人の協力が必要となる。人間は神に協力し、神とともに働くためにも創られたのである。アグネスへの手紙の中で次のように述べている。「私はあなたを神ご自身の協力者、そして妙なるおん体の弱い部分の支えであると考えます」（第三の手紙8）。

キリストがわたしたちの中で働かれ、私たちを使われるとき、キリストの兄弟・姉妹・母となるのである。弱さをもった不完全な人間にもかかわらず、神はこの人間のなかで神の栄光を現すことを望まれる。クララはパウロの書簡からこの意味を受け継いで、人々がみことばの弟子になるよう人々に働きかけている。そして、一人一人の中で、みことばが受肉してゆくことを切に望んでいるのである。

サン・ダミアノの共同体は、まさに受肉された共同体であったといえるであろう。彼女たちの祈りは、周囲の人々を、そして多くの共同体を受肉させていったのである。彼女たちは神の協働者として、大きな働きをし、クララにならって文字通り、光を放つ共同体であった。

むすび

フランシスカンの受肉の秘義を考察してきて見えてきたものは、フランシスコやクララのように、私たちも受肉の受肉(incarnations of incarnation)となるよう召されているということである。これが全キリスト者の召命なのである。神の限らない善に参与し、「神の似姿」と創られた人間がキリストのように聖化されることは、キリスト者の目的なのである。

神の謙遜が受肉であるなら、私たち人間はキリストの体の一部として神の謙遜にならって生活することが中心となるはずである。つまり、受肉の完成とは、私たちの人間の生き方にかかっているのである。キリストの十字架の贖いで完成してしまっただけではなく、現在も贖いのわざは進行中なのである。それは人間の側にかかっている。すなわち、日常の

行いの中で、キリストとの一致を喜ぶこと、キリストをすべてのもののなかに見出すこと、そしてこの世をキリスト化することは私たち人間の使命なのである。

この意味でクララは中世のシスターとしてよりも、現代に働く女性として私たちにはみえてくる。彼女の霊性は現代にこそ生き続ける。

教皇ベネディクト 16 世は、2010 年 9 月 15 日の一般謁見の中で、クララに触れて、「聖女クララの生き方をみれば、彼女のような信仰篤い勇氣ある女性は、いかに教会の刷新に多大な貢献をもたらすかを知ることができる。」と述べている。

クララの時代、教会は経済的にも豊かであり、政治的にも多大な影響力を持っていた。いわゆる世俗的権力に教会は支配されていたが、フランシスコとクララはこのような状況において、静かな革命を起こした。つまり、神のための清貧という理想をもって教会の最高権力者たちに衝撃を与え、教会の大きな刷新を成し遂げたのである。それは清貧のための清貧ではなく、貧しくなられたキリストに似るものとなるためであった。キリストはこの世に誕生したときから貧しさの中にあり、飼葉おけで生まれ、住むところもなく、最後には十字架上の死というもっともみじめな死を受け入れられた。福音に「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」（マタイ、8：20）とあるように、キリストはまったくの清貧のうちに生きた。クララは特にこの清貧に理想を見たのである。彼女の清貧を会則とするという意志は、時の教皇をも屈服させた。このような強い意志こそ教会を変える力となり、教会を受肉の秘儀へと導く原動力となるであろう。

クララが生涯を通じて示したこと、すなわち、キリストを絶えず見続け、キリストのように変容すること、そして人間の尊厳を大切に愛すること、さらに祈りと相互愛によって社会を受肉させることは、混沌とした現代においてこそ必要なことである。

クララにならって、キリストの受肉の秘義をさらに深く追求してゆきたいものである。

[注]

- (1) 教皇ヨハネ・パウロ二世、『受肉の秘義』——2000 年の大聖年公布の

大勅書，カトリック中央協議会，2000年。

Incarnationis mysterium #3

「大聖年への準備は、ここ数年、至聖の三位一体のみ名のもとに進められ、キリストを通して——聖霊のうちに——御父へと向かっていきました。三位一体の秘義は信仰の歩みの起源であり、究極の到達点、そのとき、わたしたちの目は、ついに神のみ顔を永遠に仰ぐようになるのです。受肉を祝い、わたしたちは三位一体の秘義を見つめます。ナザレのイエスは御父を啓示され、あの人間の心に秘められた願い、神を知りたい願いを満たされます。キリストの啓示のうちに、創造されたものが創造する神のみ手の刻印として自分のなかに保ってきたもの、昔の預言者たちが約束として告げてきたものが決定的に明らかになるのです。」

- (2) 長倉久子、「ボナヴェントゥラの神秘思想とその実践的射程」、『フランシスコ会学派〈下〉——ボナヴェントゥラからベルナルディノ——』、東京フランシスカン研究所、フランシスカン研究 vol.3、聖母の騎士、2007年、p.47-54。
- (3) Ilia Delio, O.S.F., *The Humility of God: A Franciscan Perspective*, St. Anthony Messenger Press, 2005., p.3.
- (4) Ibid., p.4.
- (5) Ibid., p.38.
- (6) Zachary Hayes, introduction to *Disputed Questions on the Mystery of the Trinity*, vol.3, *Works of Saint Bonaventure*, George Marcil, ed. New York: The Franciscan Institute, 1979, pp.15-16.
- (7) Ilia Delio, O.S.F., *The Humility of God: A Franciscan Perspective*, p.11.
- (8) Ibid., p.59.
- (9) Beatrice Bruteau, *The Grand Option, Personal Transformation and a New Creation*, Notre Dame, Ind., University of Norte Dame Press, 2001, pp.172-173.
- (10) Ilia Delio, O.S.F., *The Humility of God: A Franciscan Perspective*, p.25.
- (11) Ibid., P.27.
- (12) Michael W. blastic, O.F.M. Conv., *Francis and Clare's Joy in Being Human: The Mystery of The Incarnation, The Cord*, No.50., vol.6, 2000., p.266.

- (13) Sister Frances Teresa, O.S.C., *Living the Incarnation*, Darton, Longman & Todd Ltd., 1993. p.100.
- (14) Michael W. blastic, O.F.M. Conv., *Francis and Clare's Joy in Being Human: The Mystery of The Incarnation*, p.265.
- (15) Michael W. blastic, O.F.M. Conv., *Francis and Clare's Joy in Being Human: The Mystery of The Incarnation*, pp.267-268.
- (16) ジュリオ・マンチーニ, ジュリオ・マンチーニ, 『クララにしたしむ』(聖クララの生誕八百年記念), フランシスコ会日本管区, 1996年, p.2。
- (17) クララの書き物に関しては, エンゲルベルト・グラウ, O.F.M., 宮沢みどり, O.S.C. 訳, 『アシジの聖クララ 伝記と文献』(八王子聖クララ会, 1987年。)を参照した。以下, 『アグネスへの手紙』, 『ブルージュのエルメントルードへの手紙』も同様である。
- (18) ジュリオ・マンチーニ, p.8。
- (19) ローター・ハルディック, 『アシジの聖クララ — 伝記と文献』解説, 八王子聖クララ会, 1987年, pp.193-194。
- (20) Kevin Lynch, O.F.M., *A Reflection on Clare of Assisi, The Cord*, Vol.48, No.4, 1998., p.188.
- (21) Edith A. Van den Goorbergh, O.S.C. & Theodore H. Zweerman, O.F.M., trans. by Aline Looman-Graaskamp & Frances Teresa, O.S.C., *Light Shining Through a Veil*, Peeters, 2000., p.195.
- (22) ジュリオ・マンチーニ, p.31。

[邦語参考文献]

- エンゲルベルト・グラウ, O.F.M., 宮沢みどり, O.S.C. 訳, 『アシジの聖クララ 伝記と文献』, 八王子聖クララ会, 1987年。
- 教皇ヨハネ・パウロ二世, 『受肉の秘義』— 2000年の大聖年公布の大勅書, カトリック中央協議会, 2000年。
- ジュリオ・マンチーニ, 『クララにしたしむ』(聖クララの生誕八百年記念), フランシスコ会日本管区, 1996年。
- ジャコモ・ピニ, 星野雅生訳, 『アシジの聖クララ 賛美の歌』, 八王子聖クララ会, 2002年。
- 長倉久子「ボナヴェントゥラの神秘思想とその実践の射程」(『フランシスコ会学派<下> — ボナヴェントゥラからベルナルディノ —』, 東京フランシスカン研究所 フランシスカン研究 vol.3, 聖母の騎士, 2007

年, p.44-89.)

[欧語参考文献]

- Beatrice Bruteau, *The Grand Option, Personal Transformation and a New Creation*, Notre Dame, Ind., University of Norte Dame Press, 2001.
- Claire Marie Ledoux, *Clare of Assisi*, trans. by Colette Joly Dees, St. Anthony Messenger Press, 1996.
- Edith A. Van den Goorbergh, O.S.C. & Theodore H. Zweerman, O.F.M., trans. by Aline Looman-Graaskamp & Frances Teresa, O.S.C., *Light Shining Through a Veil*, Peeters, 2000.
- Frances Teresa Downing, O.S.C., *Clare of Assisi: A Woman for Today, The Cord, Vol.46*, no.4, 1996.
- Frances Teresa Downing, O.S.C., *Clare of Assisi and the Tradition of Spiritual Guidance, The Cord, Vol.48*, no.4, 1998.
- Ilia Delio, O.S.F., *Clare of Assisi: A Heart Full of Love*, St. Anthony Messenger Press, 2007.
- Ilia Delio, O.S.F., *The Humility of God: A Franciscan Perspective*, St. Anthony Messenger Press, 2005.
- Kevin Lynch, O.F.M., *A Reflection on Clare of Assisi, The Cord, Vol.48, No.4*, 1998.
- Marie Beha, O.S.C., *Clare's Trinitarian Prayer, The Cord, Vol.48, no.4*, 1998.
- Michael W. Blastic, O.F.M. Conv., *Francis and Clare's Joy in Being Human: The Mystery of The Incarnation, The Cord, Vol.50.*, no.6, 2000.
- Mother Mary Francis, P.C.C., *Clare: Mirror of Humanism, The Cord, Vol.44, No.7*, 1994.
- Sister Frances Teresa, O.S.C., *Living the Incarnation*, Darton, Longman & Todd Ltd., 1993.
- Zachary Hayes, introduction to *Disputed Questions on the Mystery of the Trinity*, vol.3, Works of Saint Bonaventure, George Marcil, ed. New York: The Franciscan Institute, 1979, pp15-16.
- Clare Centenary Series (Volume 4), ed. Mary Francis Hone, O.S.C., Franciscan Institute Publications, St. Bonaventure, New York,

1992.

Clare of Assisi: Early Documents, revised & translated by Regis J. Armstrong, OFM. Cap., Franciscan Institute Publications, St. Bonaventure, New York, 1993.